

暑 中 漫 想

浜 口 み づ ら

日本の湿った夏の暑さは、怠けものには不勉強の恰好の口実となってくれる。長く、かたいものは不適當だ、そうきめて、手近かにある Emily Dickinson の詩集をとりあげては、勝手な空想やら連想を楽しませてもらった。女性であること、キリスト教の基盤に立っていることで、わたしには親しみもて、共感をおぼえる詩人のひとりである。短詩ばかりを選んで、夏の日の中の軌跡を留めておこう。

By homely gift and hindered Words
The human heart is told
Of Nothing ——
'Nothing' is the force
That renovates the World ——

粗品につたない言葉を添えても
心は伝わるもの
何がしかは——
<何がし>こそ
この世に生氣をもたらず力——

(岡 隆夫 訳)

これを読んだとたん、岡山在住の詩人永瀬清子のごく最近新聞の学芸欄に載った詩が思い起された。切抜帳を出してページを繰る。

心の底では
みんな心の底では思っている
「ホントの事を云ってください」
「ホントの胸を聴いてください」
けれど世の中はちがうので
その願望は花の芯のように隠し抱いている
きのう心からのお悦びに行ったら
受取りをくれた
受取がなければ損をする人ばかり
街にあんなにお中元が山のように
でもあれは義理と思惑が咲いているのだ
ありあまるいま すごい金額が
右手から左手へのようにたやすく移っても
心だけは十分の一も届かない
魚をあげれば蛇
笛かと思へば骨
蓮が咲いたと見にいけば破れ靴が浮いている
ホントの心を送った筈なのに
途中のトンネルでみな燃えてしまうのです

Dickinson の詩は、兄嫁スーに心ばかりの贈物をしたとき、付け加えたものであろうと推測されているが、物それ自体より、それを贈る人の心の方により高い価値をおいている。それから百年たった今日、物は豊富になり、形あるものが威力をもって、形なきものが疎んぜられる世相を永瀬清子は嘆いている。歳月や場所をへだてても、鋭い詩人の眼が見抜く真理に変わりのないことを一条の涼風のように感じた。

暑 中 漫 想

A face devoid of love or grace,
A hateful, hard, successful face,
A face with which a stone
Would feel as thoroughly at ease
As were they old acquaintances, ...
First time together thrown.

愛もやさしさもない顔
憎らしくていかめしい 出世顔
もし石と一諸になれば
はじめて出会っても
さながら旧知の友人のように
すっかりくつろげるような顔

(岡 隆夫 訳)

石庭などといって、石をありのままで愛でたり、または、さまざまなものに作って身辺に置き親しむ風習は、日本独特のものなのだろうか。わたしたちにとって石はもっとあたたかく、赤いよだれかけをした、鼻かけのお地藏さまのイメージと結びつく。A rolling stone gathers no moss. の解釈は日英で180度異なるが、彼の地の stone とこちらの石はどの程度重なり今うものなのだろうか。暑さで間のびした顔に、磯村英樹の「詩集いちもんじせせり」の中の「石」と題する一篇が浮んでくる。

石

石を磨けば玉

玉は魂^{たま}の容れもの

綴って首にかけ
みだれる女心を神のように鎮める

黒く耀やく石は
矢に入れる眸
矢玉は狙うものに素早く追いつがり
息の根深く突き刺さる

葬った死者の魂が
荒らび出ないように
偉大であった者ほど
重い石をのせて押えつける

墓地は女を宥らせる
犇と抱きしめる石の
芯のいのちが息づくので
女は妊るまで離さない

妊った女は岩室むろにこもり
酸化鉄の赤 孔雀石の青で
石の壁いっばいに
魂たまの絵を描きひろげる

ここでは石は、生よりもさらになまめかしく、生を生むものとして描かれている。文字になってはいないが色彩も豊富で、詩全体があでやかに眼の前に展がる。抑制されたエロティシズムさえ感じる。同一の石というメタフォがこなにも違った作品を生むところが詩の面白さだと思う。

I held a jewel in my fingers
And went to sleep.

暑 中 漫 想

The day was warm, and winds were prosy

I said: "Twill keep."

I woke and chid my honest fingers,.....

The gem was gone;

And now an amethyst remembrance

Is all I own.

掌に一粒の宝石をにぎって
わたしはまどろんだ
あたたかく 風おだやかな日
「大事にしなくちゃ」とわたしはつぶやいた
目ざめて わたしは貞節な指を叱った
宝石がなくなっていたのですもの
今 わたしにあるのは
あの紫水晶の思い出だけ

(拙訳)

若い女性のとり逃した幸福、あるいは、恋への切ない回想が美しい静かにうたわれている。Dickinsonらしいつつましい表出が、紫水晶の落ち着いた輝きと重って胸に泌みてくる。誰でもが経験するようないことを、こうしてとばにできるのが詩人であろう。

同じ回想をうたっても、日本の現代詩は、もっと陽性で乾いている。

私のカメラ

茨木のり子

眼

それは レンズ

まばたき

それはわたしの シャッター

髪でかこまれ

小さな 小さな 暗室もあって

だから わたし

カメラなんかぶらさげない

ごぞんじ？ わたしのなかに

あなたのフィルムが沢山しまっているのを

木洩れ陽のしたで笑うあなた

波を切る栗色の眩しいからだ

煙草に火をつける 子供のように眠る

蘭の花のように匂う 森の中ではライオンになったっけ

世界にたったひとつ だあれも知らない

わたしのフィルム・ライブラリイ

A death-blow is a life-blow to some

Who, till they died, did not alive become;

Who, had they lived, had died, but when

They died, vitality begun.

死の一撃は生の一撃

死ぬまで目覚めなかった者には――

生きたとしてもずっと死んでいて

死んではじめて生が始まる者には――

(岡 隆夫 訳)

暑 中 漫 想

Dickinson は die や death の語を好んで用いる。しかし信仰に生きる彼女は死を恐れてはいない。それに詩人は誰しも真実を求め、真の生を生きようと死を見つめるものだ。だから、生と死を主題にした詩は多い。西脇順三郎の「永遠を象徴しようとしないうちに、初めて永遠が象徴される」ということばが頭をかすめる。

十分に生きなかつた者は
十分に死ぬこともできない
死のうと身構えもしないうちに
死は
気まぐれな風のようにやってくる

黒田三郎の「遺書」の一節である。

生と死は紙一重で見分け難く、生きてると信じている当人でさえ、死んでいることもあり得る。Dickinson は恐ろしいことをたった四行でいつてのけている。日本の詩人はもっとのどかに首をかしげている。

生きているもの・死んでいるもの

茨木のり子

生きている林檎 死んでいる林檎
それをどうして区別しよう
籠を下げて 明るい店さきに立って

生きている料理 死んでいる料理
それをどうして味わけよう
ろばたで 峠で レストランで

生きている心 死んでいる心
それをどうして聴きわけよう
はばたく気配や 深い沈黙 ひびかぬ暗さを

(中略)

生きているもの 死んでいるもの
ふたつは寄り添い 一緒に並ぶ
いつでも どこでも 姿をくらし
姿をくらし

Look back on time with kindly eyes,
He doubtless did his best;
How softly sinks his trembling sun
In human nature's west!

去りにし時をやさしくふりかえれ
過去はまことよく尽してくれた
ふるえる太陽が音もなく
人の世の西方へと沈みゆく

(拙訳)

極めて自閉的、自制的であった詩人が静かに自分の最後を見つめている姿が目に見え、同じく過去に眼を向けている、大阪の生んだ詩人伊東静雄の作品が連想される。

読 人 不 知

深い山林に退いて
多くの旧い秋に交っている

暑 中 漫 想

今年の秋を

見分けるのに骨が折れる

いい詩だと思う。いずれも四行詩で、交互に味ってみると面白い。絢爛たる夕映えを描いた油絵と水墨画を同時に楽んでいる気分で、興味はつきない。

形あるもの、色彩あるものは誰の眼にも見える。詩人は普通の眼が捉えようとしないうものを追い求め、それを発見する人である。箕面でその生涯を閉じた詩人港野喜代子は、「詩は、ショックをあたえること、詩を書くのは、自分にもこの世にショックをあたえるために書く」といっている。わたしに見えないものが、ある人には明瞭に見えているというのはショックである。だからわたしは詩を好んで読む。さらに、詩人は自分のことばをもっている。語学教師も自分のことばをもたねばならない。だからわたしは詩に関心をもつ。

The thought beneath so slight a film
Is more distinctly seen,
As laces just reveal the surge,
Or mists the Apennine.

うすいフィルムをすけてみえる思考こそ
いっそうはっきり見られます
レースが心のかおりをあらわにし
霧がアペニン山をうかがわせるように

(拙訳)

この系列に属するものが他にもいくつかある。彼女の作品の殆んどは題名がない。そこで番号で示す。

993番

見えないものこそ一等よく見えます
榛いろの瞳をとざし
祈りによって見るのです
睨に思い出はないのですが――

(後略)

611番

闇の方がずっとよく見えるわ
光など要らないわ

(後略)

詩人は何かを見ようと闇に眼をこらす。関西在住の詩人多田智満子も闇の中に美しく、香ぐわしいもの、はたまた恐ろしいものを発見している。

闇

まっくらな夜空に
薔薇が充満している
幾万もの薔薇がうごめいている
わたしにはそれがわかる
うなじに落ちるこの重い夜露が
ひしめきあう薔薇の汗だということが

華麗で、しかもばらの棘の痛さをも感じさせる詩である。たったこれだけのことで、視覚、臭覚、触覚にショックを与えるとは驚異である。読んだあと、静かに眼をつぶっていると、甘い香りがまわりに漂い、皮膚がチクチク刺される。

暑 中 漫 想

とりとめもなく書き綴ったが、最後に、わたしの詩の先達福中都生子の「詩集淡海幻想」から好きな一篇を引用してペンを措く。

こ と ば

詩はやさしさのきわまるところに
そのつきあたりに立っている
詩では ほんとうのことしか語れない
ほんとうのことを言うためには
沸騰するような勇気がある
その熱情の底には
自分自身への 相手への 他者への 世界全体への
いとおしさがこんこんとたたえられていて
それは しずかな湖の朝に似ている